

## *The House of Fame* と「貿易商人の話」における五感の表現

— 真実と嘘をめぐって —

地村彰之

岡山理科大学教育学部中等教育学科

(2020年10月27日受付、2020年12月11日受理)

### 0. はじめに一視覚・聴覚・触覚に関わる感覚表現の視点から

チョーサーの *The House of Fame* (『名声の館』) では、真実と嘘が交じり合った世界が示される。ここでは、作品の語り手である私が、新しい知らせを受け取ることになる。語り手は、作品の中に存在し、第三者として聴衆・読者のような立場にありながら、登場する鷲に案内され、新しい世界を知る。この作品では視覚だけではなく、聴覚の問題も提示される。つまり、鷲から音の伝播についての講義を語り手が受けることになるからである。すべての *speech* が名声の館に届くという。音の伝達を含めて、チョーサーの新たな旅とも言えるような新世界の発見がある。名声の館を中心に外に広がる視界、遠く広がっていく世界が眼前に現れる。

一方、『カンタベリー物語』では、真実と嘘の混合した世界が具体的に身近な人間世界の中に存在している。登場人物どうしの複雑な人間関係が見られる。*The Merchant's Tale* (『貿易商人の話』) を取り上げ、作中人物の新たな旅とも言える老人と若い女性との関係が、商人という語り手によってどのように表されていくかについて見ていく。この作品で使われる色彩語に焦点を当てつつ、聴覚や触覚を示す表現を取り上げながら、老人と若い女性との結婚において、感覚表現という角度から真実と嘘が、どのように我々の現前に提示されているかについて見ていく。

### 1. 『名声の館』における視覚と聴覚

チョーサーの『名声の館』における視聴覚に関わる表現として、“*newe thynges*” (新しい事柄) や “*newe tydynge*s” (新しい知らせ) という表現を中心に見ていく。旅をすることによって新しい知らせを得ることや経験ある人たちに会うことが、その当時の人たちには楽しみであった。まず『名声の館』では、夢を見る詩人、鷲に乗せられて旅をする詩人、音声の旅 (音声の発生と名声の館から飛び出していく様々な価値観を伴う声の旅)、そして最後に、“*a man of auctoritee*” (とても権威のある人) との出会いがあった。

中世においても、旅の速さに対する憧れは当然あった。現代では当たり前である、音より早く旅をして新しいものを見ることは、中世人には夢であった。魔法の指輪によって、行きたい所へは何処でも行くことが出来ればよかったのである。これは中世の人たちの新しいものを見る旅に対する夢であったであろう。チョーサーの夢物語詩の夢は、素早く飛んでいける中世人の旅に対する憧れを表しているのであろう。ここでは、鷲が語り手を新しい情報で満ち溢れている館へと運んでくれる。

素朴な詩人は、鷲が言う *speech* (言葉) について疑いの気持ちを表す。自分の聴覚に対する疑いとも繋がる。すべての *speech* が名声の館に届くというからである。ここで鷲は *speech* における *sound* (音声) の問題を議論する。日常使っている *speech* の *sound* にどのような物理の法則が関わっているか教えてくれる。鷲は、大学の教授であり、万有引力や波動の法則をよく知っているかのように、その法則を詩人に講義する。ここで鷲によって、次々に伝達されてくる新しい *tydynge*s は、「自然」 (“*kynde*”) の法則に基づいている。

“Geoffrey, thou wost ryght wel this,  
That every kyndely thyng that is

Hath a kyndely stede ther he  
 May best in hyt conserved be;  
 Unto which place every thyng  
 Thorgh his kyndely enclynynge  
 Moveth for to come to  
 Whan that hyt is away therfro;  
 .....  
 That every thyng enclyned to ys  
 Hath his kyndelyche stede:  
 That sheweth hyt, withouten drede,  
 That kyndely the mansioun  
 Of every speche, of every soun,  
 Be hyt eyther foul or fair,  
 Hath hys kynde place in ayr.  
 And syn that every thing that is  
 Out of hys kynde place, ywys,  
 Moveth thidder for to goo,  
 .....  
 Than ys this the conclusioun:  
 That every speche of every man,  
 As y the telle first began,  
 Moveth up on high to pace

Kyndely to Fames place. (729-852)

(ジェフリー、おまえはこれをよく知っているはず、／自然界に存在するあらゆる物は、／もつともよく保存され得る／本来の場所をもっているということ。／どんな物もみんな、／本来の場所から離れている時があっても、／その生来の性向によって／その場所に移動してくるのだ。／……／あらゆる物が行きたく思う／その場所が、きっと、／その本来の場所なのだ。／無論、それは次のことを証明している。／あらゆる言葉、あるいはあらゆる音の／当然の居場所は、／それらが汚かろうと美しかろうと、どちらにしても、／空中に当然見られるのだ。／その本来の場所に現在いない／どんな物も、きっと、／そこへ行くために動くのだから、／もしそこから離れていても、／前に証明したように、／誓って、あらゆる音は、結果として、／その本来の場所にみんな、／当然動いていくのだ。／……／そこで結論はこうなのだ。／あらゆる人々のどんな言葉も、／初めに話したように、／＜名声＞の場所へ当然ながら、／高く昇って行くのだ。)(笹本長敬訳、以下『名声の館』の引用文はすべて笹本訳による。下線は筆者。)

ここでは、*kynde* から派生した語が繰り返し使われている。あらゆる種類の新たな *tydynges* は、*kynde* のありのままの姿に支配されながら、名声の館にやってくる。そこで、詩人は自分の *experience*、つまり自分の目と耳を最大限に使う実験を行うことによって、その *tydynges* を調査しようとする。これは視覚と聴覚の実験と考えられる。

この驚は、*kynde* の法則によって、その館に運ばれる音は、真実と虚偽の両方から成り立っていると言う。

“What?” quod I. “The grete soun, ”  
 Quod he, “that rumbleth up and doun  
 In Fames Hous, full of tydynges,  
 Bothe of feir speche and chidynges,  
 And of fals and soth compounded. (1025-29)

(「何の音ですか」と私はたずねました。／驚は答えました。「＜名声の館＞のあちこちで、／がやがやいっているその大きな音は、知らせで充満し、／巧言と小言との両方と、／虚言と真実とで成り立つ

ているのだ。)

両極端な価値が名声の館には存在している。詩人はその館に到着し、驚は詩人にその前で新しいことを自分の目と耳で学習させるために置き去りにする。詩人は、新しい世界の発見をするとともに、真実と虚偽が両義的に混合されている複合的価値について、客観的な判断を下す必要に迫られる。

詩人は、追い求めてきた新しいことを、まだ見つけることが出来ない状態にいる。詩人は、名声の女神に自らのアイデンティティを尋ねられた時、断固として自分の立場を述べる。

For what I drye, or what I thynke,  
I wil myselven al hyt drynke,  
Certeyn, for the more part,  
As fer forth as I kan myn art.” (1879-82)

(だって私が現在経験するもの、あるいは思うものは何であれ、／その出来具合に応じて私自身ですべて飲むつもりですが、／私の詩の技術を知る限りでは、／きっと、大部分飲む、というところでしょうから。)

この引用文は、詩人が創造しようとしている art (技巧) に対する強い意識を示している。これは、味覚表現とともに使われ、技巧を饗宴のようなところで飲み込み自分のものにしてしまおうとする詩人の野心を感じる。art を最大限に利用して、表現したいものを少しでも表現できればいいのである。ただし、art によって表される内容は、気まぐれなその時にあわせた判断によってなされるような偽造されたものであってはならない。今日まで気まぐれに名声を求めてきた人々は、もう詩人の目には新鮮ではなくなったようである。すべて古い世界に属し、気まぐれな名声の女神によって支配されているからである。

そこで、詩人はさらに明確に自分の立場を明らかにする。

Somme newe tydynges for to lere,  
Somme newe thinges, y not what,  
Tydynges, other this or that,  
Of love or suche thynges glade. (1886-89)

(いくつかの新しい知らせを、／何か私には分かりませんが、いくつかの新しいことを、／あれこれの知らせを、／あるいはそのような喜ばしいことを知るためです。)

glade (うれしい) と newe (新しい) という言葉から判断して、その tydynge (知らせ) は、人々の耳を新鮮な気持ちにし、楽しませるものであろう。しかし、噂の館は噂話とおしゃべりで満ち溢れている。この館は詩人が求めたものではなかった。まるで tydynges の母親とも言われ、名声の女神と同じく気まぐれである *Aventure* (偶然) のみを満足させているかのようであった。

そのとき、今では“myn egle” (わたしの驚) になっている賢明な驚が、再登場し、最後の“newe tydynges” (新しい知らせ) を伝える役割を果たす。“me thoughte hit (= this hous) stente” (2031) (すると家の回転が止まったようだった) という事実によって、その新しい知らせを耳で聞くだけでなく、目で見ることによって、詩人が落ち着きを取り戻したように思われる。flor (床) の上に立つことが出来た。ここで今まで出会ったことがないような人々に出会う。その中に足を踏み入れることが出来ないぐらい大勢いる。人々は一見真実と思えることを伝え、伝達という自然の法則に依存しながら、次々にそれを拡大していく。彼らは知らせが olde になる前に伝えていく。tydynge が真実であろうと虚偽であろうと、お構いなしのようである。真実と虚偽を耳で聞くだけでなく、視覚においても客観的に判断する状況に置かれることになった。

最終的に彼は“tydynges of love” (愛の知らせ) を聞く。愛に関する新しい情報を学んだ後、真実と虚偽が見事にお互い混ざり合った、複雑な愛の世界の中に入っていくことを決める。“We wil medle us ech with other,” (2102) (お互いに混ざり合おう) に見られるだけでなく、次の一節に新しい世界が示される。

And, Lord, this hous in alle tymes

Was ful of shipmen and pilgrimes,  
 With scrippes bret-ful of lesinges,  
 Entremedled with tydynges,  
 And eek allone be hemselfe.” (2121-25)

(おやおや、この家はいつも、／真の知らせと混じり合った／あふれんばかりの嘘の知らせの鞆、／あるいは真の知らせだけの鞆をもった／船乗りと巡礼者でいっぱいでした。)

様々な愛の両面的価値が存在している複雑な世界の中で生きながら、どのような名声を求めていくかがつかめるようになる。旅を続けた詩人が、偶然自信を与えてくれる人物をじかに自らの目を見た。ここで、詩人の聞いて見てきたものは auctoritee (authority=権威) と結びついたのである。

“A man of gret auctoritee” (偉大な権力をもつ人) が、最後の舞台に登場する。

Atte laste y saugh a man,  
 Which that y [nevene] nat ne kan;  
 But he semed for to be  
 A man of gret auctorite.... (2155-58)

(とうとう [名前を] 知らない／一人の男が見えました。／その人は偉大な権力をもつ人のように／思えました…。)

詩人が最終的に見た人で、想像力の中に現れたもっとも権威ある人は、真実を告げる人であったように思われる。最初の段階から真実を追い求めてきた詩人は、「技巧」を飲み込むという味覚も含めて、たび重なる視聴覚の実験という旅を続けながら、最終段階で真実の知らせを伝えてくれる人物に出会ったのである。この表現は、この作品と後に書かれた『カンタベリー物語』との架け橋となり、旅を続ける詩人に本当の名声を伝達する役割をする。

## 2. 「貿易商人の話」における視覚・聴覚・触覚・味覚

商人は『カンタベリー物語』の「序の詩」において、周りには自分の本性は決して現さずに、利潤を得ることばかりを考えているというように紹介される。

A MERCHANT was ther with a forked berd,  
 In mottelee, and hye on horse he sat;  
 Upon his heed a Flaundryssh bever hat,  
 His bootes clasped faire and fetisly.  
 His resons he spak ful solempnely,  
 Sownynge alwey th'encrees of his wynnynge.  
 He wolde the see were kept for any thing  
 Bitwixe Middelburgh and Orewell.  
 Wel koude he in eschaunge sheeldes selle.  
 This worthy man ful wel his wit bisette:  
 Ther wiste no wight that he was in dette,  
 So estatly was he of his governaunce  
 With his bargaynes and with his chevyssaunce.  
 For soothe he was a worthy man with alle,  
 But, sooth to seyn, I noot how men hym calle. (I(A) 270-84)

(ふたまた髭つけた貿易商人がおりました。／まだらの衣服をつけ、馬上たかく坐しておりました。／頭にはフランドル製のビーヴァーの毛皮帽がのっており、／長靴はとても優美に留め金で結んでありました。／彼は自分の意見をさも重大そうに話しましたが、／いつでも、儲けの話になるのがおちでした。／彼はミドルバーグ港とオーウェル川との間の／海はどんな犠牲を払っても守ってほしいものだと言っ

ておりました。／彼はまたフランス金貨を両替するやりかたをよく知っていました。／このお偉い方は知恵を最高度にはたらかせました。／彼が借金をしていることを知っている者は誰もおりませんでした。／何しろこの男、金の貸し借りのやりかたときたら、／とても堂々として威厳がありましたので。／ほんとうに彼は立派な方といえました。／だが、実を言いますと、わたしは人がこの男をどう呼んでいるか知らないのです。）（梶井迪夫訳、以下、『カンタベリー物語』の引用文はすべて梶井訳による。）

実際は、語り手だけは真実をご存知で、眼が見えていたようで、この商人は金持ちに見えるのに借金を抱えていたと言う。ただ、語り手にもこの商人の名前はわからないと言う。実はわかっているのが、現実にとどのかずすぐわかってしまうのでとぼけていたのかも知れない。まだらの服を着て人に正体を見えないように誤魔化しているにもかかわらず、つまり、他人からの視覚を誤魔化してきたと思っていた商人が、語り手には真の姿を見通されていたのである。

作品では突如として眼の見えなくなった老人ジャンヌアリーに対して、よく眼が見えると思っている若い女性メイが、結婚という取引をして利潤を得て楽しんだということになる。天上の神のいたずらで急に眼が見えるようになった老人の目の前で赤裸々な行為が明らかにされようが、女性は天上から授けられた方便を上手に使い、誤魔化してその場の危機を乗り切り利潤を得るのである。

以上のことから、貿易商人は抜け目がなく、結局見えていると思っていることが、実は見えていないというテーマを、老人の若いみずみずしい女性との楽しい取引として提示する。中世では聴覚が一番重要であると言われており、チョーサーの作品における五感の中では視聴覚が特に大事であると言える。これは、「心焉にあらざれば、視れども見えず、聴けども聞こえず、食らえどもその味を知らず」（『大学』第三章より）に通じている。

For – God be thanked! – I dar make avaunt  
I feele my lymes stark and suffisaunt  
 To do al that a man bilongeth to;  
 I woot myselfen best what I may do.  
 Though I be hoor, I fare as dooth a tree  
 That blosmeth er that fruyt ywoxen bee;  
I feele me nowhere hoor but on myn heed;  
Myn herte and alle my lymes been as grene  
As laurer thurgh the yeer is for to sene. (1457-66)

（ああ、ありがたや、神様！あえて自慢を申し上げるがね、／わしは自分の四肢がいやしくも男にやれることは／皆やれるほど強くて肉体が活気に溢れているのを感じている。／わしは自分のできることを自ら一番よく知っている。／わしは白髪頭だけれど、実のなる前に花の咲く木のようにやれるんだ。／花の咲く木は乾いてもいないし、死んでもいない。／わしは白いのは頭の上以外どこにも感じていない。／わしの心もわしの四肢も皆、年中みられる月桂樹のように青々としている。）（引用文中の下線は筆者。）

この引用文では、「白髪」という視覚に訴えるところを「感じる」という触覚で感じているところが大事である。触覚については若者となんら変わるところがないと自信を持って述べているところである。さらに、身体が青々としていることは、視覚表現へと移って行き、触覚と視覚の融合した世界が示される。ジャンヌアリーはメタフォリカルに自分の心と体が「緑」であると言っている。色彩表現として「緑」は後でジャンヌアリーが造る庭園の「緑」につながっていく。この緑は『薔薇物語』において描写されている歓び、愛、陽気と結びつく緑を連想させる。「歓びに満ちた愛の季節、すべてのものが陽気になる時、茂みも垣もことごとく新しい葉で身を飾り、おおいつくそうとする。冬の間枯れていた木立は緑を取り戻す」（篠田勝英訳『薔薇物語』（上）より）。ただし、『薔薇物語』では5月の陽気が緑と結びつくことを一般的に描写しているだけであって、チョーサーのように特定の人物や作品と関連させて描いているのではない。

Somme clerkes holden that felicitee

Stant in delit, and therfore certeyn he,  
 This noble Januarie, with al his might,  
 In honest wyse, as longeth to a knight,  
 Shoop hym to lyve ful deliciously.  
 His housynge, his array, as honestly  
 To his degree was maked as a kynges.  
 Amonges othere of his honeste thynges,  
He made a gardyn, walled al with stoon;  
So fair a gardyn woot I nowher noon.  
 For, out of doute, I verrailly suppose  
 That he that wroot the Romance of the Rose  
 Ne koude of it the beautee wel devyse;  
 Ne Priapus ne myghte nat suffise,  
 Though he be god of gardyns, for to telle  
The beautee of the gardyn and the wellle  
That stood under a laurer alwey grene.  
 Ful ofte tyme he Pluto and his queene,  
 Proserpina, and al hire fayerye,  
 Disporten hem and maken melodye  
 Aboute that welle, and daunced, as men tolde. (2021-41)

(学者の中には、幸福は愉悦にあり、という意見を抱いている人がいます。そこで、確かに彼、／つまり、この気高いジャンヌアリイは、ありとあらゆる力を尽くして／騎士にふさわしい立派なやり方で贅沢な生活をしようと心に決めました。／彼の家屋も、彼の衣服も、彼の地位にふさわしく立派に王様のようにしつらえられていました。／彼の持っている立派な物の中でも、特に彼は庭園を一つ造りました。／それは石の壁で周囲をすっかりめぐらされていました。／このように美しい庭園はどこにもありません。／と申しますのは、疑いもなく、わたしはあの『薔薇物語』を書いた作者も／その美しさを十分には述べるができなかったと本当に思いますから。／それにプリアプスだって、彼は庭園の神様ではありますが、／この庭園や常緑の月桂樹のもとにある泉の美しさを十分に述べることはできなかったことでしょう。／何度も何度も、かのプルートとその妃／プロセルピーナと、彼女の妖精の仲間たちが／その泉のほとりで遊びたわむれ、楽しいメロディを奏でながら踊っていた、ということです。)

ジャンヌアリーが造ったこの庭園と常緑の月桂樹の美しさが描写される。『薔薇物語』でも書き表すことができないような美しさの中で、情事が繰り広げられるのであるから、緑が人間たちの活力と如何に繋がっているかがわかる。

And so bifel, that brighte morwe-tyde  
 That in that gardyn, in the ferther syde,  
 Pluto, that is kyng of Fayerye,  
 And many a lady in his comaignye,  
 Folwynge his wyf, the queene Proserpyna,  
 Which that he ravysshed out of [Ethna]  
 Whil that she gadered floures in the mede –  
 In Claudyan ye may the stories rede,  
 How in his grisely carte he hire fette –  
This kyng of Fairve thane adoun hym sette  
Upon a bench of turves, fresh and grene.  
 And right anon thus seyde he to his queene: (2225-36)

(それで次のようなことが起こりました。その輝く朝のころ、／庭の向こうの端の方に／妖精の国の王

であるブルートーと、／その一団の多くの貴婦人たちが／彼の妻プロセルピーナ女王に従っていました。／さてこの女王は彼女が牧場で花を摘んでいた時に、／ブルートーがエトナから連れ去った妃ですが—／彼が恐ろしい車の中に彼女を載せて連れ去った次第は／クラウドリアンの書いた物語でお読みになることができます。／さてこの妖精の国の王は新緑も鮮やかな芝生の土手に腰を下ろしました。／下ろすとすぐに彼はこのように妃に言いました。）

天上の世界も「緑」に満ち溢れている。下界で行われている破廉恥な出来事をお見通しであるブルートーは、ジャーヌアリーに視力を戻してやろうと考え、そのとおりに実践する。視覚がこの作品でいかに重要であるかを示すところである。

Now lat us turne agayn to Januarie  
That in the gardyn with his faire May  
Syngeth ful murier than the papejay,  
“Yow love I best, and shal, and oother noon.”  
So longe aboute the aleyes is he goon,  
Til he was come agaynes thilke pyrie  
Where as this Damyan sitteth ful myrie  
An heigh among the fresshe leves grene.  
This fresshe May, that is so bright and sheene,  
Gan for to syke, and seyde, “Allas, my side!  
Now sire,” quod she, “for aught that may bityde.  
I moste han of the peres that I see.  
Or I moot dye, so soore longeth me  
To eten of the smale peres grene.  
Help, for hir love that is of hevene queene!  
I telle yow wel, a woman in my plit  
May han to fruyt so greet an appétit  
That she may dyen but she of it have.” (2320-37)

（さて、わたしたちは再びジャーヌアリーのことに戻しましょう。／彼は庭の中で美しいメイと一緒に／鸚鵡よりもさらに楽しく歌っております、／「わたしはあなたを一番好きよ、これから先も。誰もほかに愛しはしない」などと。／彼はとても長いこと庭の小道をさまよい歩き、／とうとうかの梨の木の実真前にやって来ました。／そこではこのダミアンが樹の上高く新鮮な緑の木の葉の中にさも楽しそうに腰を下ろしています。／かくも輝くばかりに美しい、このみずみずしいメイは／溜息をついて言いました。「ああ、ああ、わたしのおながが！／ねえ、あなた」と彼女は言いました。「どんなことがあっても目の前の梨を食べなくちゃなりません。／そうでないとわたしは死んでしまいます。／あの緑の小さな梨の実をわたしはとても食べたいんですから。／助けてくださいまし。天国の女王であられるお方の愛にかけて！／わたしはあなたにちゃんと申し上げますが、／わたしのような身重な女は果物をひどく欲しがるものです。／食べなければ死ぬかもしれないくらいです。」）

現代英語の *green* は、吉村（2006: 225-26）によると、「成長する」の意のゲルマン祖語の語根から来ており、「成長する草の色」を表し、「植物が毎年、春に大地の土塊を押しつけて芽を出すところから、能動性を表す *red* とは対照的に、若さ・成長・繁栄・元気・自由・平和・喜び・歓待・恋の芽生えや、復活・永遠・不滅を表し、中立性、受動性も表している。負の意味では、優柔不断・未熟・嫉妬・不吉を表している。そして、無限・普通の愛を表す *blue* と、知恵を表す *yellow* とを混ぜた色であるところから、*green* は『気まぐれな愛』や従順の意も持っている。人間に反映した意味が与えられていることが特徴的」（吉村 2006: 225-26）である。徳井（2006: 6）によると、「中世の緑も、春の蘇る自然の美しさを代表する色であると同時に、混沌と破壊と夢を表す『悪魔』の色」でもある。緑色は「たしかに青春と愛の色であり、さらに歓喜と結婚、そして子どもと五月というキーワードが並ぶことに違和感はない」（徳井2006: 103）。*green* の現代的意味は、吉

村がまとめているように多様であり、中世では徳井が述べるように、青春、愛、歓喜、結婚を象徴していると考えてよさそうである。これは、まさにジャヌアリーが年をとっていることとメイが浮気をするものを除けば、二人の結婚にふさわしい色と言えそうである。

ジャヌアリーは60才を過ぎた時に、女房もちになりたいという大変な欲望を起こしたと書かれている。ジャヌアリーは蜜のように甘い（味覚）結婚の中に、昔からある楽しい生活や徳に満ちた平安のことを熟慮していた。老人ジャヌアリーは、びちびちと弾けるような若いメイとの結婚を考えていた。

ジャヌアリー（January）はJanusを語源にしていることからすると、前と後に二つの顔を持っているのであるから、前後を見ることができるとは必ずである。その後、プルートー王（王妃はプロセルピナ）がジャヌアリーの眼を見えなくしてしまう。待っていたかのように、メイは愛人を引き寄せ、梨の木の上で不倫の行為を実践する。プルートー王は見えていられなくなったからか、ここでジャヌアリーの視力を戻すことを決める。（一方、プロセルピナはメイに方便を使わせることを決める。）人間界の男と女のやり取りが、神の世界にもあることがわかり、愉快である。

メイが方便を使いながら木から降りてくる。それを聞いたジャヌアリーが文字通り、その言葉そのままに取り、喜んで何度も彼女に接吻をしたり、さすったり、おなかを撫でてやったりして、二人は部屋へ行く。方便として使っている言葉をそのままに受け取り満足するジャヌアリーは、幸せな老人である。まさに聞こえているにもかかわらず聞こえていない状態である。この老人の触覚だけは、十分に発達している。

視覚について言うと、ジャヌアリーは眼が見えている時から周りの状況が読めていなかった。つまり、見えていなかった。よく見えなくなつて見えるようになるという教訓とも相容れずして、ジャヌアリーの眼は見えなくなった時に、心の眼が見えるようにならなかった。さらに、運よく再度視覚を与えられた時も、状況把握ができていないほど幸せな人間である。終始一貫して、眼が見えないということである。

### 3. おわりに一地上と天上の庭園の色彩豊かな表現

『名声の館』における新しいものとの出会いについて、感覚表現を通してみてきた。さらに、断片的ではあるが、「貿易商人の話」における感覚表現に見られる真実と嘘の実態を観察してきた。真実と嘘については、見間違いしやすいのが常であるが、たえず見極めることできる視野を持つことが重要である。

チョーサーは自分の目で新しい世界を見るだけでなく、新しい文学作品を読み、自らの創作に生かしていた。チョーサーが生きた14世紀は、政治的、経済的、宗教的、社会的に変革期であった。このような厳しい時代、チョーサーが、特に外交的使者としてフランス、フランドル地方へ派遣されたことの意味は、新鮮な感覚表現をはじめとする新しい知らせを獲得するためでもあったと考えることができる。チョーサーは、母国に帰ってからは、そこで体験したことを、自らの作品の中に表そうとした。『薔薇物語』の翻訳も、この体験に基づいている。それが「商人の話」では、地上と天上の庭園の色彩豊かな表現と繋がり、特定の作品と人物描写に反映されている。チョーサーは、自ら公務としヨーロッパへ旅をしたことによって視野を広げ、自らの感覚表現に対する大いなる遺産とした。



## 参考文献

- Benson, Larry D. (ed.) (1987) *The Riverside Chaucer*, 3rd ed. Boston: Houghton Mifflin.
- Brewer, Derek S. (1960, 1973<sup>3</sup>) *Chaucer*, London: Longman.
- Brown, Peter (ed.) (2000) *A Companion to Chaucer*, Oxford: Blackwell.
- Cook, Albert Stanburrough (ed.) (1915) *A Literary Middle English Reader*, New York: Ginn and Company.
- Dyas, Dee (2001) *Pilgrimage in Medieval English Literature, 700-1500*, Cambridge: D. S. Brewer.
- Ellis, Steve (ed.) (2005) *Chaucer: An Oxford Guide*, Oxford: Oxford University Press.
- Gray, Douglas (ed.) (2003) *The Oxford Companion to Chaucer*, Oxford: Oxford University Press.
- ジャック・リバー（著）、原野 昇（訳）(2000) 『中世の象徴と文学』京都：青山社。
- Jimura, Akiyuki (1991) "Chaucer's Use of 'soth' and 'fals' in *The House of Fame*," *Philologia* 23 (三重大学英語研究会), 11-35.
- 地村彰之 (1992) 「*The House of Fame*における対照語法とその用法」『英語英文学研究とコンピュータ』（斉藤俊雄編）東京：英潮社、195-213。
- 地村彰之 (2000) 「チョーサーの英語に見る異文化」原野昇、水田英実、山代宏道、地村彰之、四反田想共著『中世ヨーロッパに見る異文化接触』広島：溪水社、127-173。
- 地村彰之 (2002) 「チョーサーの英語における多元性」原野昇、水田英実、山代宏道、地村彰之、四反田想共著『中世ヨーロッパ文化における多元性』広島：溪水社、79-118。
- 地村彰之 (2003) 「チョーサーと格言的表現—複眼的思考の一考察」原野 昇・水田英実・山代宏道・地村彰之・四反田 想・大野英志（共著）『中世ヨーロッパと多文化共生』広島：溪水社、71-109。
- Jimura, Akiyuki (2005) *Studies in Chaucer's Words and his Narratives*, Hiroshima: Keisuisha.
- 地村彰之 (2011) 『チョーサーの英語の世界』広島：溪水社。
- Jimura, Akiyuki (2018) "Chaucer's House Revisited," *Studies in Medieval English Language and Literature*, No. 33, 1-27.
- Jusserand, Jean J. (1891) *English Wayfaring Life in the Middle Ages*, translated from the French by L. T. Smith, London: T. Fisher Unwin.
- 金谷 治（訳注）(1998) 『大学・中庸』東京：岩波書店。
- 菅野正彦 (2002) 『ジョン・ガワー研究』東京：英宝社。
- 苅部恒徳・笹川寿昭・小山良一・田中芳晴（編・訳・注）(2000) 『原文対訳：カンタベリー物語・総序歌』東京：松柏社。
- 榊井迪夫 (1962, 1973<sup>2</sup>) 『チョーサー研究』東京：研究社。
- 榊井迪夫 (1976) 『チョーサーの世界』（岩波新書）東京：岩波書店。
- 榊井迪夫（訳）(1995) 『完訳カンタベリー物語』東京：岩波書店。
- Ohler, Norbert (1989) *The Medieval Traveller*, translated by Caroline Hillier, Cambridge: The Boydell Press.
- バストゥロー、ミシェル（著）、篠田勝英（訳）(2008) 『ヨーロッパ中世象徴史』東京：白水社。
- Pearsall, Derek Albert (1992) *The Life of Geoffrey Chaucer: A Critical Biography*, Blackwell Critical Biographies vol. 1, Oxford: Blackwell.
- 鯖田豊之 (1989) 『ヨーロッパ中世』（世界の歴史9）東京：河出書房新社。
- 斎藤 勇・他 (1985) 『チョーサーとキリスト教』（中世英文学シンポジウムシリーズ第1集）東京：学書房出版。
- 斎藤 勇 (2000) 『チョーサー—曖昧・悪戯・敬虔』東京：南雲堂。
- 笹本長敬（訳）(1998) 『初期夢物語詩と教訓詩』大阪：大阪教育図書。
- 笹本長敬（訳）(2002) 『カンタベリー物語（全訳）』東京：英宝社。
- 篠田勝英（訳）(2007) 『薔薇物語』（上・下）東京：筑摩書房。
- 塩見知之（訳）(1981) 『チョーサーの夢物語詩』東京：高文堂。
- 徳井淑子 (2006) 『色で読む中世ヨーロッパ』（講談社選書メチエ364）東京：講談社。
- Zacher, Christian K. (1976) *Curiosity and Pilgrimage*, Baltimore and London: The Johns Hopkins UP.
- Ward, A. W. and A. R. Waller (eds.) (1908) *The Cambridge History of English Literature*, Vol.II, Cambridge: Cambridge UP.
- 山下主一郎（訳者代表）(1984) 『イメージ・シンボル事典』東京：大修館。
- 吉村耕治（編著）(2004) 『英語の感覚と表現—共感覚表現の魅力に迫る』東京：三修社。

吉村耕治（2006）「環境保全の指標としての色名Green（緑）の意義―日英比較表現論から見た緑の多様性」吉村耕治（編）『言語文化と言語教育の精髓―堀井令以知教授傘寿記念論文集』大阪：大阪教育図書、221-237。

〔本稿は、関西外国語大学で開催された日本中世英語英文学会西支部第24回例会（2008年6月14日）のシンポジウム「Chaucerの愛のテーマと五感の表現―その感覚表現の特徴」において、口頭発表した論文に加筆したものである。〕

## Sensory Expressions in *The House of Fame* and “The Merchant’s Tale”: In Regard to Truth and Falsehood

Akiyuki Jimura

*Department of Secondary Education, Faculty of Education  
Okayama University of Science,  
1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan*

(Received October 27, 2020; accepted December 11, 2020)

**Keywords:** Chaucer; *The House of Fame*; “The Merchant’s Tale”; visual and auditory; experience

This paper has discussed the poet’s accidental encounter with the new tidings, investigating the sensory expressions in *The House of Fame*. Then I have observed the actual conditions of truth and falsehood seen in the sensory expressions in “The Merchant’s Tale.” Chaucer came to acquire his own view of ascertaining the truth, though it is often difficult to distinguish between the truth and the falsehood.

*The House of Fame* visually shows the mixed world of truth and falsehood. The narrator, as described by the first person pronoun *I*, receives the new information. The narrator, always staying in the internal world of this work, sees the magnificent and glorious images of light, guided by the eagle. This work displays the auditory sense as well as visual sense. The eagle says that every “sound” goes to the House of Fame, discussing the matter of actual “sound” of “speech.” Thus the narrator experiences both visual and auditory images in the new world.

On the other hand, the compounded state of truth and falsehood is visually and audibly revealed in *The Canterbury Tales*. For example, January receives May’s white lies properly as he has heard them in “The Merchant’s Tale.” He does not understand what she really means, although he listens to her speech. He enjoys his sensual lust. And he is not able to see the true things around him, even when he has his own sight. He is always blind whether or not his eyes see everything around him.

Chaucer developed his own creative skills, reading new literary works, to say nothing of seeing the new world in the European continent. Chaucer lived in the age of revolutionary political, economic, religious and social changes in the fourteenth century England. Chaucer made a journey to Europe such as France or Italy by diplomatic mission. He learned of various new tidings such as new sensory expressions and gained wisdom from his experience abroad. After he returned to England, he tried to express his visual and auditory experience from overseas in his works.